

授業概要

本講義は、歴史を叙述・研究し学ぶ営みが西洋でどのようにして生まれ育まれてきたかを、古代地中海世界の戦争の記述から始め、現代英仏の「社会史」研究の最先端にいたるまでの歴史を概説する。西洋の歴史学・歴史叙述の最大の特徴は、過去を描くことにどのような意味があるのか、そして過去をどのように描くかという問題に常に真剣に取り組んできたことにある。本講義ではこの歴史哲学上の問題に、三つの視点からアプローチする。第一に歴史観という思想の問題として、第二に歴史叙述のスタイルという文学的表現の問題として、そして第三に歴史調査研究方法という技術の問題として、である。加えて受講者の理解促進のため、それぞれの叙述や歴史観の時代背景としての現実の歴史過程の紹介も、可能な限り実施する。

授業計画

第 1 回	講義概要説明： 歴史を見る目と西洋の文化的特質
第 2 回	古代地中海の歴史叙述①： ギリシアの歴史叙述
第 3 回	古代地中海の歴史叙述②： ローマの歴史叙述
第 4 回	中世の歴史叙述①： キリスト教の「終末論」と「普遍史」叙述 その評価
第 5 回	中世の歴史叙述②： アウグスティヌスと「フライジングのオットー」 西暦の導入と世界史
第 6 回	近世の歴史叙述①：ルネサンスの歴史叙述 「神」の叙述から「世俗」の叙述へ
第 7 回	近世の歴史叙述②：「大航海時代」の歴史叙述 客観記述の確立とその意義
第 8 回	近代の歴史叙述①： 「理神論」と「自然状態」の思想
第 9 回	近代の歴史叙述②： 啓蒙思想の「進歩史観」と「文化史」叙述の確立
第 10 回	近代の歴史叙述③： 「進歩史観」の方法上の問題と「歴史主義」の台頭
第 11 回	近代の歴史叙述④： レオポルト・フォン・ランケ「史料批判」の意義 近代歴史学の誕生
第 12 回	現代の歴史叙述①： 「実証史学」の欠陥と新しい歴史叙述スタイルとしての「経済史」
第 13 回	現代の歴史叙述②： マルクス「唯物史観」とロストウ「テイク・オフ」理論
第 14 回	現代の歴史叙述③： イギリスの社会史 レスター学派とケンブリッジ・グループ
第 15 回	現代の歴史叙述④： フランスの社会史 アナール学派の「全体史」 講義総括
第 16 回	筆記試験実施 論述式

到達目標

歴史叙述や歴史研究の思想としての発展過程を理解し、それが人間の「客観世界」の認識にどのように貢献してきたか、あるいはそのような客観認識をどのように深めてきたかについて幅広い教養と専門知識とを獲得すること。それを通して、国際化する社会において国際理解を促進する意思と能力とをもつこと。

履修上の注意

基本的な歴史過程についての知識を、例えば高校「世界史」教科書などで確認しておくこと。とくに西洋の哲学・倫理・宗教・思想などは直接講義内容に関わるため、よく理解しておきたい。理解の深化を目的にレポートの作成が求められる。また知識定着度を測るため小テストを計 5 回実施するのでもれなく受験すること。そして言うまでもなく、無断での欠席・遅刻は厳禁である。

予習・復習

毎回授業の最後に次回授業のキーワードを提示するので、あらかじめ調べておくこと。また授業中に問題提起をし、また質問を受け付けるコーナーを設けるので、理解が不十分な点はその場で確認すること。授業後さらに調査をし、ノートの充実にも努めること。質問は授業後も受け付けるので、遠慮なく質問・要望を示してほしい。

評価方法

定期試験の成績に小テストの成績・レポートの評価を総合して評価する。その配分基準は、定期試験 60%、小テスト（5 回実施予定）成績 20%、レポート 20%とする。

テキスト

教科書は特に用いない。参考図書など関連文献は、授業内でその都度紹介する。